

第 1 回 部 会

R元(2019).10.30 (まちと活力)

R元(2019).10.31 (地域とくらし)

資 料 4 - 2



仙台市基本計画の検討資料



目次

I はじめに（P 1）

- ・計画の策定に向けて
- ・計画の体系
- ・計画期間
- ・計画の対象

II 時代背景と本市の現状（P 4）

- ・時代背景
- ・仙台市のこれまでの歩み
- ・課題認識と仙台市の強み

III 新たな杜の都に向けて～目指す都市の姿～（P 5）

- ・まちづくりの理念
- ・都市個性と目指す都市の姿

IV 本市が大切にする姿勢（P 10）

- ・チャレンジ協働まちづくり～ともに考え、新たな価値を生み出す～
- ・多様性が活きるまちづくり～多様性をまちの豊かさにつなげる～
- ・大都市としてのまちづくり～東北の可能性を開く～
- ・持続可能なまちづくり～未来への責任を果たす～

V 重点プロジェクト（P 12）

- ・未来へつなぐ防災環境プロジェクト
- ・みんなでつくる地域未来プロジェクト
- ・笑顔はなまる子どもプロジェクト
- ・いきいきライフデザインプロジェクト
- ・TOHOKUチャレンジプロジェクト
- ・せんだい都心再構築プロジェクト

VI 基本的な施策の方向性（P 25）

VII 区別計画（P 27）

VIII 進行管理の方針（P 27）

IX 資料編（P 27）

I はじめに

1 計画の策定に向けて

総合計画は、仙台市が目指す都市像とその実現に向けた施策の方向性を示すまちづくりの指針です。まちづくりは行政だけで進めるものではなく、市民やNPO、教育機関、企業などの様々な主体とともに取り組む必要があります、みんなが進むべき方向性を共有するために、この総合計画を策定します。

本市はこれまで、戦後の人口増加や高度経済成長を背景とした都市インフラの拡大、政令指定都市への移行に象徴される「成長期」から、市民の価値観の多様化やグローバル化などの環境変化に伴って、物質的な豊かさの追求から質的な心の豊かさを志向する「成熟期」へと、その歩を進めてきました。

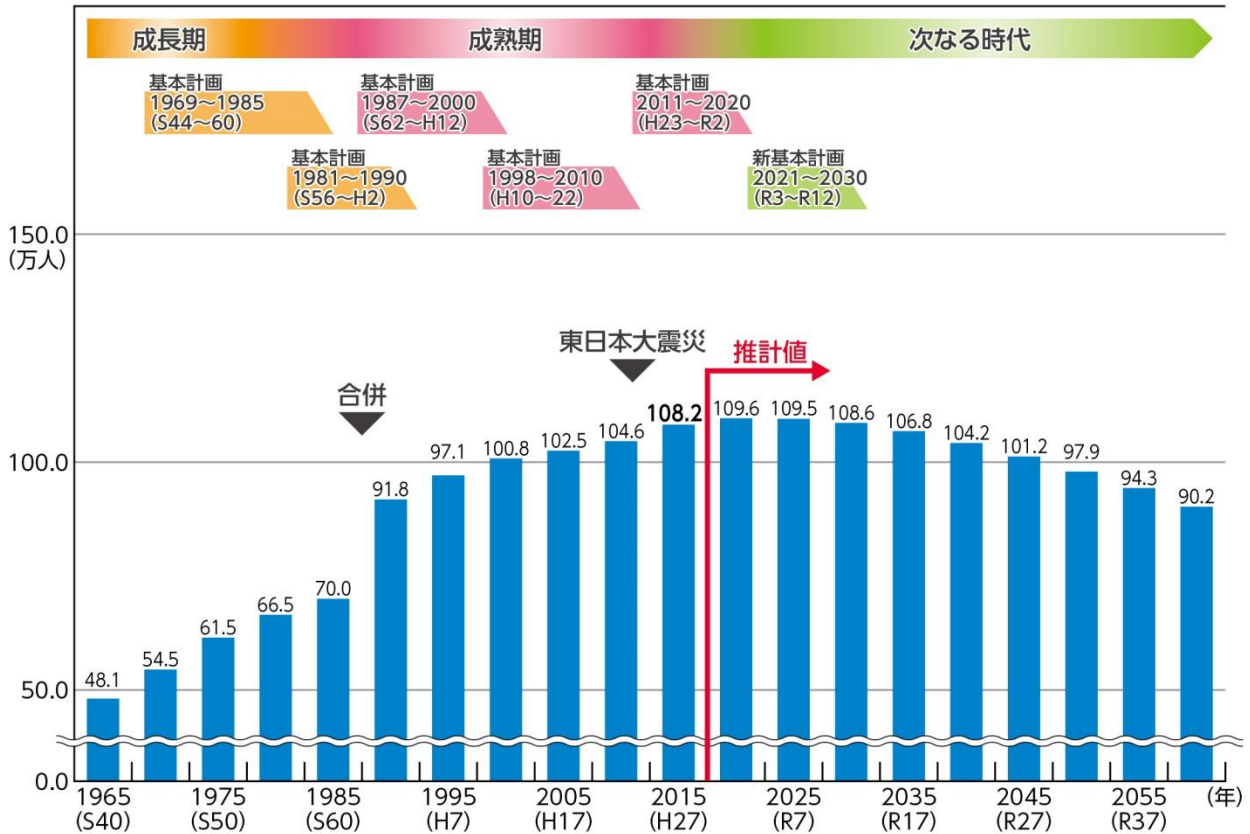
近い将来、確実に受けることとなる人口減少の影響や、ますます進むであろうグローバル化、さらにSDGsにおいて掲げられる持続可能性など、多様な視点がこれからのまちづくりでは求められます。そして、さらなる高度情報化やテクノロジーの進化によって、日常生活における新たな価値が創出されることで、私たちの社会環境・生活環境は大きく変わることが予想されます。

そのような時代だからこそ、将来にわたって大切にしたい確かなまちづくりの理念を持ち、それを市民と共有するとともに、多様な価値観を活かし、テクノロジーを使いこなすなど、新たな文化への適応と挑戦の気概がより一層重要になってくると考えます。そして、これまで先人が培ってきた都市の資産や知恵を活かしながら、多様な主体が持てる力を発揮し、「次なる時代」を生き抜くための都市力を高めていかなければなりません。

日本全体は既に人口減少が始まっており、今後一貫して減少するとの見込みの中、特に東北地方は落ち込みが激しいと予測されています。本市の人口も減少局面を迎えようとしています。進行のスピードは比較的緩やかであるため、東北における本市の人口シェアを含め、中枢としての役割はますます高まると見込まれることから、今後は東北から見た仙台や、世界から見た仙台の視点もより必要となってきます。

このような時代の潮流も踏まえながら、本市では誰もが豊かに暮らせる仙台の未来に向けたまちづくりを進めていきます。

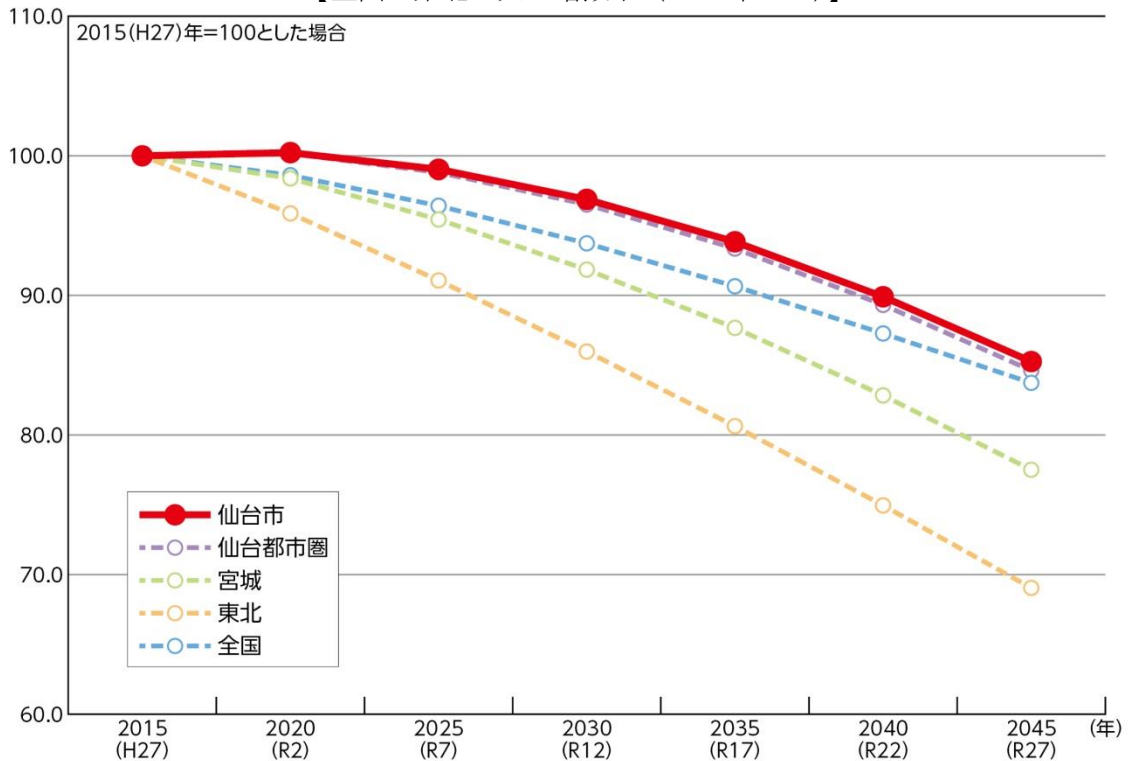
【仙台市の人口推移と将来の見込み（1965～2060年）】



出典：国勢調査結果（総務省統計局）、まちづくり政策局資料

注：各年10月1日現在。将来推計人口は平成27年10月1日時点の国勢調査人口をもとに、コーホート要因法により本市が独自に推計。合計特殊出生率は、過去の傾向を勘案し、1.27で一定で推移。社会移動率についても同様に、年1.29%ずつ減少するものと仮定。

【全国・東北の人口増減率（2015年=100）】



出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年推計）－平成27～57年」

注：仙台都市圏とは、仙台市、塩竈市、名取市、多賀城市、岩沼市、富谷市、亘理町、山元町、松島町、七ヶ浜町、利府町、大和町、大郷町、大衡村の14市町村

2 計画の体系

- ・新総合計画は、まちづくりの理念と目指す都市の姿、これらを実現するために取り組む施策の方向性を総合的・体系的に示した「基本計画」、目標を着実に実現していくための具体的な施策を定める「実施計画」で構成します。
- ・長期的な展望を持ってまちづくりを進めていくため、時代の潮流を見極めながら、実施計画や毎年度の予算編成において柔軟に事業を組むことで対応していきます。

3 計画期間

- ・まちは長期的な展望のもと、相当程度の期間をかけて進めなければならない課題等に対し、様々な取り組みを重ねることで形づくられることから、「基本計画」の計画期間は10年間とし、初年度を令和3年度（2021年度）、目標年次を令和12年度（2030年度）とします。
- ・「目指す都市の姿」については、行政運営の長期的な指針となるものであるため、21世紀半ば（2050年頃）を見据えることとします。

4 計画の対象

- ・本計画の対象は、本市の区域内に住所を有する方のみならず、本市へ通勤、通学する方や、市民活動団体、地縁団体、教育機関、事業者など、様々な形で本市のまちづくりに関わる多様な主体を含めるものとします。
- ・さらには、仙台を故郷とする方々、ビジネスや観光で仙台を訪れる方々、様々な機会を経て仙台に縁を感じ、関心を寄せる方々にも目を向けていきます。また、これから産まれてくる「次なる時代」を担う方々に対しても責任を持つ計画とします。

Ⅱ 時代背景と本市の現状

1 時代背景

- ・世界の人口の動向、都市間競争の激化
- ・災害リスクや生態系の破壊など国境を越えた環境問題の深刻化
- ・持続可能な開発目標「Sustainable Development Goals : SDGs」の広がり
- ・グローバル化やテクノロジーによる新たな可能性
- ・日本では人口減少と少子高齢化が進展（2025年問題）

2 仙台市のこれまでの歩み

- ・市制施行、戦災復興期、高度経済成長期
- ・合併と政令指定都市移行
- ・市民協働によるまちづくりの推進
- ・東日本大震災の発災と復興

3 課題認識と仙台市の強み

《課題認識》

- ・復興需要の収束
- ・都心部の建築物の老朽化、面的な賑わいの不足
- ・若者の東京圏への流出と人口減少・少子高齢化に伴う労働力の不足
- ・いじめや虐待への対応など子どもたちが安心して成長できる環境づくり
- ・コミュニティの形成や総合公共交通体系の構築・新たな交通手段の確保など持続可能な暮らし
- ・新たな災害の発生リスク
- ・様々な都市インフラの老朽化、持続可能な市政運営における財政状況への危機感

《仙台市の強み》

- ・人口構成上の強み（学生が多い、高齢化率が低い）
- ・東日本大震災の経験・教訓（仙台防災枠組、国連防災世界会議、様々な災害対策）
- ・市民協働の理念の浸透
- ・東日本大震災を契機とした社会的課題解決志向の高まり
- ・良質な研究環境（活発な産学官の連携、次世代放射光施設の立地決定、ICT関連企業の集積）
- ・暮らしやすい都市環境（快適な気候、緑、交通機関の充実、治安の良さ）
- ・多彩な文化芸術・スポーツや社会教育施設（市民イベントの充実、学びの場の充実）

Ⅲ 新たな杜の都に向けて～目指す都市の姿～

本市には、いくつもの誇るべき都市個性があります。開府 400 年を超える歴史資産である杜の都の都市環境、多くの若者が集い学ぶ学都としての機能集積、福祉のまちづくりを醸成してきた共生の理念、東北唯一の政令指定都市としての中枢機能と広域性に加えて、近年では東日本大震災からの復興を通じて世界に誇る防災力が培われてきました。

それらは、困難な状況に直面してもなお、より良いまちをつくりたいと行動を起こしてきた先人の想い、市民の力があつたからこそ築き上げられたものであり、市民協働によるまちづくりの積み重ねもまた、未来へ活かしていきたいかけがえのない財産だと考えています。

「まち」は、建築物や環境資源のような空間だけで形作られるものだけではなく、その地に住まう人々、行き交う人々の内面や行動をも包含しているものです。

「成熟期」から「次なる時代」へと都市が歩みを進めるためには、これまで培った都市個性を深化させていくだけでなく、それらを掛けあわせることで、相乗効果を生み出しながら、まちづくりを推進するダイナミズムが必要です。豊かな自然と都市機能が調和した都市環境を基盤として、多様な主体がそれぞれの価値観を認めあい、学びあい、何度もチャレンジすることができる機運を作り上げ、仙台の希望ある未来と、東北を牽引する活力を生み出していくことが重要です。

このまちが培ってきた市民協働の理念のもと、「環境」「共生」「学び」「活力」という 4 つの都市個性を活かすとともに掛けあわせ、ともに創意工夫と挑戦を重ね、仙台が仙台らしく輝ける新たな杜の都を目指します。

<まちづくりの理念>

挑戦を続ける、新たな杜の都へ

＜背景＞

仙台の代名詞である「杜の都」の由来は、藩祖伊達政宗公が、飢餓対策や建築資材確保を目的として植樹を奨励したことに端を発しており、屋敷林や庭園など緑が色濃く残る城下町の景観を指して、明治末期頃からこのように呼ばれるようになったと言われています。この言葉には、緑豊かな都市環境はもとより、「神社や寺、屋敷のまわりを取り囲んでいる緑、人々が丁寧に手入れをしてきた緑こそが仙台の宝」という緑を育んできた人々の想いが込められています。

戦災により、都市部の緑の多くは失われましたが、青葉通や定禅寺通へのケヤキの植樹などの街路樹の整備や都市公園の整備などを通じて「杜の都の再生」は進められました。そして、高度経済成長期に都市環境が悪化する兆しがあった際にも、青葉山や広瀬川などの美しい自然や生活環境を守りながら、まちに杜を育むこの理念は今日まで受け継がれてきました。

そして現在では、東日本大震災の経験と復興における教訓をもとに、防災や環境配慮の視点を「杜の都」の理念に織り込み、安全で安心できるまちづくりを進めています。自然と調和した住みよい暮らしの実現のために、困難を乗り越え、市民とともにより強く美しい未来を創る「杜の都」の理念は、このまちの原点であり、次の時代にふさわしい形で引き継いでいきたいと考えています。



＜目指す都市の姿＞

世界を牽引する防災環境都市へ

東日本大震災の経験を最大限に活かし、災害に強く安心して暮らすことができる生活基盤を実現するために、自助・共助・公助による防災力のさらなる向上を図ります。そして、「杜の都」の豊かな自然環境を活かし、質の高い快適な生活環境と、風格のある都市環境が調和した都市空間を磨き上げ、世界を牽引していく防災環境都市を目指します。

＜背景＞

1960年代以降、高度経済成長により都市が飛躍的な発展を遂げる中、本市では人口の過密による衛生上の問題や公害の発生など、生活上の様々な課題が顕在化しました。そのような社会背景のもと、障害のある方は「生活圏拡張運動」を展開し、歩道や公共施設の段差など物理的・社会的な障害の解消に声を上げました。市民による市政への参加により「福祉のまちづくり」が進められた結果、本市は日本で初めて「身体障害者福祉モデル都市」の指定を受けることとなり、バリアフリーのまちづくりは本市から全国に広がったと言われています。

同時期には、住民と行政が一体となって、急速に汚濁の進んだ梅田川の清流を取り戻す運動が行なわれ、全市に広がりました。また、1980年代には、春先の粉塵公害の解消を目指して脱スパイクタイヤ運動が行なわれ、県や企業を動かし、国に立法を迫るほどの大きなうねりになりました。近年では、2011年の東日本大震災発生時、町内会をはじめとする地域団体やNPO、企業など多様な主体それぞれの持つ強み、支え合いの力が復興の推進力となりました。このように、本市では市民による行動の積み重ねによって、暮らしやすいまちのあり方が模索され、共生の礎が築かれてきました。

現在、少子高齢化の進展や単身世帯の増加など、個人を取り巻く環境は大きく変化しています。このような変化の中で、誰もが地域で共生できる社会を構築するためには、年齢、性別、国籍、障害の有無などの多様性をそのままに尊重し、認めあう社会が必要とされています。そのような社会を目指すとともに、本市ではさらに、一人ひとりの多様な経験が社会の豊かさにつながるよう、多様な立場にある方々との協働を重ねながら共生できる社会を創り上げていきます。

＜目指す都市の姿＞

多様性が社会を動かす共生のまちへ

誰もが安心して自分らしく暮らすことができる社会をつくるため、あらゆる人が社会に溶け込み、多様性が尊重され、そのままに包摂する風土の構築を図ります。また、一人ひとりが持つ多様な価値観や経験を、社会全体がより良い方向に進むための力に変える、誰もが暮らしやすい共生のまちを目指します。

＜背景＞

本市には、大学をはじめとする教育機関が集積しており、多くの若者がこの地で集い学ぶ、豊かな学びの環境があります。古くは藩政時代、藩校養賢堂や寺子屋等での学びに始まり、1872年の学制公布以降には全国で2番目に古い官立学校が設置され、公立・私立を問わず多数の教育機関が本市には創設されました。鎌倉時代から続く伊達家の文芸を尊び好奇心に溢れる気風のもと、豊かな緑によって静寂と清浄に包まれた市街地は学びの場にふさわしく、多くの市民にとって多彩な学びの機会があったことで、このまちは「学都」と呼ばれるようになったと言われています。そして戦後には社会教育が開花したことも加わり、これまで多くの人々がこの地で学び、数々の文化人が輩出されてきました。

このまちはこれまで育んできた質の高い知的資源と、学術・文化を尊ぶ風土は、創意と工夫が求められるこれからのまちづくりにおいて大きな強みとなるものです。現在も本市の総人口に占める大学生と短大生の割合は他政令指定都市と比較しても高いこと、東日本大震災以降には本市を舞台として数多くの方々に成長の機会があったこと、近年は若者をはじめとした社会への貢献意識の高まりも見られることから、それらを結び付けて次の社会を創る力に変えていきます。



＜目指す都市の姿＞

学びと挑戦の文化が根付くまちへ

変化の激しい時代環境においても、将来を担う子どもたちが健やかに育ち、個性を伸ばしていくことができる豊かな学びの環境をつくります。また、仙台を学びと挑戦の舞台とし、あらゆる人にとって成長の機会、創造性を育む機会があふれ、それらの機会が新たに人を惹きつけるまちを目指します。そして、この地で学んだ人々が、次の仙台をつくり、東北や世界の未来に貢献できる人材を次々と輩出するまちを目指します。

＜背景＞

江戸時代、藩祖伊達政宗公は現在の都心部に城下町を築きましたが、それはまちそのものを創り出す一大事業でした。現代の都心部の骨格としても脈々と受け継がれている基盤の目状の都市計画や暮らしに必要な用水の確保など、創造から生まれたこのまちには、新しい技術や知恵を取り込む創意工夫が尊ばれる進取の気風が育まれてきました。文化的な観点でも、市民の手によって育まれてきた仙台七夕まつりや定禅寺通ストリートジャズフェスティバルのように、賑わいをもたらす力として、その精神は息づいています。

一方、本市は、明治時代から高度経済成長期を経て築かれた広域的な都市基盤を有しており、東北を統括する様々な都市機能が集積しているとともに、国際的・広域的な交流の拠点となる仙台空港や仙台港、高速道路などのインフラ環境が充実しています。加えて、東北6県から流入する方々に支えられている人口構造など、本市の活力は東北地方との深い結びつきの中から生み出されている点にも大きな特徴があり、人口減少が深刻な東北の未来を見据えて、本市が担うべき役割を再定義することが必要です。

近年は、新規開業率の高まりや次世代放射光施設の立地決定、建て替えやリノベーションなどによる都心機能の更新など、まちに新しい変化を吹き込む機運が盛り上がりつつあります。本市が活力を持続的に生み出すためにも、時代の変化に呼応しながら、一人ひとりの創造性が開く文化を醸成し、仙台市という自治体の枠を超えたまちづくりを進めていきます。

＜目指す都市の姿＞

東北の活力を生み出す創造のまちへ

新たな変化を生み出す企業・起業家などを惹きつける環境づくりや、都市活力の中心的な舞台となる都心部の再構築、多様な働き方の推進などを通じて、一人ひとりの創造性が開かれ、活力を生み出すまちづくりに取り組みます。そして、東北、世界を結びつけるハブ機能を持つ都市として、絶えず多彩な内外の交流が生まれる躍動感あふれるまちを目指します。

IV 本市が大切にする姿勢

- ・目指す都市の姿を実現するためには、市民が安心して快適な暮らしを営むことができる安定的な都市運営を行うことはもとより、協働の理念のもと、新たな課題にトライし、何度もやり直すことができる環境づくりが重要です。
- ・みんなでまちをつくる機運を醸成し、より良いまちをつくるために多様な主体がそれぞれのチャレンジを探し、目標に向け力を発揮していく、挑戦の文化を根付かせていきます。
- ・今後のまちづくりに向け大切にしていける基本姿勢を、次のとおり掲げます。

1 チャレンジ協働まちづくり～ともに考え、新たな価値を生み出す～

(1) 政策形成への市民参画促進

- ・政策形成の段階からの市民参画の積極的な取り込み（市政や地域課題等への興味・関心の喚起、行政運営に対する意識の向上、政策形成への参画の場づくり）
- ・「学都・仙台」として、未来を担う若者の柔軟な発想を生かしたまちづくりの推進

(2) 新たな価値創造へのチャレンジ

- ・企業、大学、行政など多様な主体間で社会的課題を共有し、その解決に向け新たな価値とともに創り出す風土の構築
- ・都市個性の質の向上を目指し、多様なセクターとの協働や多様な経歴を持つ人材の活用により仙台発で社会的インパクトを生み出すチャレンジの推進

2 多様性が活きるまちづくり～多様性をまちの豊かさにつなげる～

- ・すべての人が包摂される社会づくり（世代や性別、国籍、障害の有無などに捉われることなく、一人ひとりを尊重し、誰もが相手をおもんばかる住みやすいまちづくり）
- ・多様な価値観を活かしたまちづくり（多世代、多様な主体間の交流環境づくり、多彩なバックグラウンドのある方々の知恵やつながりを生かした創造性あふれるまちづくり）

3 大都市としてのまちづくり～東北の可能性を開く～

(1) 地域目線のまちづくり

- ・様々な地域の実情に応じた地域づくりを推進するための区役所の機能強化（地域との課題認識の共有、課題解決に向けた多様な主体との連携支援体制の強化）

(2) 東北の中心都市にふさわしいまちづくり

- ・政治・経済・文化など多様な分野にわたる東北の牽引（東北の中心都市としての機能強化、東北各都市との連携促進、グローバルな視座、シティセールス）
- ・人口減少が顕著な東北の社会課題解決に向けたチャレンジの積み重ねと東北への成果の還元
- ・国、県との役割分担の見直しによる質の高い地方分権の推進

4 持続可能なまちづくり～未来への責任を果たす～

(1) SDGs の達成に向けた取り組み方針

- ・SDGs の推進に向けた基本的な考え方
- ・SDGs の達成に向けた本市の先導的な取り組みである、自然豊かな都市環境や東日本大震災の教訓を活かしたまちづくりの継承



(2) 持続可能な都市マネジメント

- ・健全な財政運営の推進（歳入確保、受益負担のあり方見直し、歳出削減、事業の重点化）
- ・公共施設総合マネジメントの推進（総合的な管理・保全の強化（長寿命化の推進等）、施設の質・量の適正化、民間活力の導入推進）
- ・AI や RPA など新たなテクノロジーの活用による業務プロセスの効率化、市民サービスの向上
- ・オープンデータの推進と活用

V 重点プロジェクト

- ・仙台らしさを際立たせるプロジェクトや、新たな仙台らしさをつくるプロジェクトを重点プロジェクトと定めて推進していきます。

1 「仙台市総合計画審議会における審議経過」の7つの重点的な取り組みの視点

| 視点 | 内容 | 詳細 |
|----|---------------------------------|--|
| ① | 仙台を磨き伝える ～世界に輝く杜の都の深化と継承～ | 震災の教訓、防災力、自然環境を生かした快適な都市環境による都市ブランド確立 |
| ② | 仙台でともに生きる ～多様性が活きるまちの実現～ | 多様な価値観・立場の方々の考えをより良いまちづくりのために活かし合える社会 |
| ③ | 仙台で暮らす ～地域コミュニティの強化～ | 多様な主体が協働を実践することで顔の見える関係が広がり安全に暮らせる地域 |
| ④ | 仙台で育つ ～子ども・子育て応援まちづくり～ | 子どもを通じて関係主体が連帯感を深め、子ども達が安心して社会に羽ばたける社会 |
| ⑤ | 仙台で学ぶ・活かす ～学びの環境づくりとチャレンジ応援～ | 多彩な学びの環境づくりと、あらゆるライフステージでチャレンジできるまち |
| ⑥ | 仙台で働く ～働く場所として選ばれる環境づくり～ | 地元企業の経営力・魅力が向上し、多様な人の力が地域経済を活性化させるまち |
| ⑦ | 躍動する仙台を創る ～都心再構築と交流都市づくり～ | 民間投資を呼び込む魅力的な都心機能を備え、交流を生み出す、活力と賑わいの創出 |

2 7つの視点とプロジェクト案の関係性

| No. | プロジェクト（PJ）案 | 視点 | 中心となる視点 | 主な都市個性 |
|-----|-------------------|-------|---------|--------|
| 1 | 未来へつなぐ防災環境プロジェクト | ①×②×⑦ | ① | 環境・活力 |
| 2 | みんなでつくる地域未来プロジェクト | ②×③×⑤ | ③ | 共生・学び |
| 3 | 笑顔はなまる子どもプロジェクト | ②×④×⑤ | ④ | 共生・学び |
| 4 | いきいきライフデザインプロジェクト | ③×⑤×⑥ | ⑤ | 共生・学び |
| 5 | TOHOKUチャレンジプロジェクト | ⑤×⑥×⑦ | ⑥ | 学び・活力 |
| 6 | せんだい都心再構築プロジェクト | ①×⑥×⑦ | ⑦ | 環境・活力 |

3 各部会における担当プロジェクト

| 部会 | 担当プロジェクト | 中心となる視点※②は共管 |
|--------|----------|--------------|
| 地域とくらし | 2、3、4 | ③、④、⑤ |
| まちと活力 | 1、5、6 | ①、⑥、⑦ |

目標

防災環境都市のブランド力向上、世界への発信

東日本大震災の経験と教訓をこのまちの未来に、世界に伝えていくことは私たちの使命です。SDGs 推進の中心的なプロジェクトとして、将来の災害や気候変動のリスクなど、あらゆる脅威に備えた世界に誇るしなやかで強靱な都市を目指すとともに、杜の都の緑豊かな自然環境を発展的に守り育む取り組みを進めます。



01 防災環境×ひと

- 子どもたちへの防災教育などを通じた防災・減災意識の高い人材の育成
- 学校、地域、企業、行政など関係団体間の連携を促進させた地域防災力の向上
- 杜の都の自然環境を守るとともに、活用する意識の高い人材の育成・確保
- 危機的状況に備えた多様な主体とのパートナーシップの構築、見える化

02 防災環境×まち

- 脱炭素社会への取り組み（再生可能エネルギー導入促進、消費エネルギー削減）
- 市民や企業等との協働によるプラスチック資源の循環に向けた取り組み
- 国土強靱化地域計画等に基づく、あらゆるリスクを想定した安全安心なまちづくりの推進、インフラ整備における長寿命化・耐震化

施策の方向性 (例)

03 防災環境×グリーン

- 魅力ある都市景観の構築及び自然災害リスクの低減、気候変動の緩和を念頭に置いた緑化の推進
- 民間活力導入等による公園の魅力向上など、緑の多機能性を有効に活用した市民が楽しめる環境づくり

04 防災環境×チャレンジ

- まちづくりにおける防災の視点の主流化を図る取り組みの推進と、世界への発信による防災文化への貢献及び防災環境都市としてのブランド力の向上
- 先端技術を取り入れた防災力向上に資する防災ビジネスの活性化促進

【参考】 審議経過

- ・杜の都の資産の活用（青葉山、広瀬川等の自然・歴史資産や公園、街路樹等の都市の緑について適正な維持管理を行うとともに、市民がより身近に触れ、楽しむ視点に立った活用、建物更新時などにおける景観への配慮の強化、グリーンインフラの導入など）
- ・「仙台防災枠組 2015-2030」を踏まえた防災環境都市づくり、東日本大震災の経験と教訓の継承・発信、災害への対応力の強化（防災意識の高い人材の育成、先端技術の導入等）、気候変動への適応、脱炭素社会実現へ向けた施策展開（消費エネルギー削減、再生可能エネルギー導入促進など）

**【参考】
第6回
審議会**

- ・杜の都は、防災と環境保全、経済効果、ブランド、市民の誇りの掛け合わせになっている。
- ・世界に向け売り出すなら「防災環境都市」。ブランドを「防災ビジネス」につなげ、経済効果を生むことも重要。
- ・杜の都の深化とは、優れているところを強化する、防災を含め「杜」の定義を拡張すること。市民が使いこなすことも深化につながり、杜の都の品格にもつながる（ひいては経済効果にもつながる）。
- ・住んでいる人にとって居心地の良い場所・環境は、観光で訪れた人にとっても良いこと。都市の暮らし自体を売りにすることを追求すべき。
- ・温暖化を踏まえると、人を守るためのグリーンインフラを進めるべき。

**【参考】
第1～5回
審議会
主な意見**

- ・低炭素の取り組みが不十分。脱炭素社会を10年で達成することは困難だが目指す目標としては良い。
- ・自然エネルギーを使う、エネルギー消費を減らす視点があると良い。
- ・市民が楽しみ尽くすのが杜の都。
- ・災害に強いということを丁寧に議論すると世界に打って出る要素になり得る。災害が来る前提で、それでもしなやかに回復する、さらに成長を目指すレジリエンスの精神を表現したい。
- ・防災は地域コミュニティのための1つのベースとして使える。避難所のあり方を検討している中で、みんなで助け合ったことが素晴らしい教訓。そのためにも顔の見える関係があることが大事。
- ・自然災害に見舞われた仙台が知っていることを世界に発信していくべき。
- ・非常時でも安全に対応できることが学びであり、発信すべきもの。

**【参考】
分野ごとの
主要な論点**

- ・脱炭素社会の実現に向けた特色ある方針、施策を打ち出していくとともに、着実な実施に向け協働して取り組むための人づくり・仕組みづくりが必要ではないか。
- ・自然環境を都市個性として最大限に活用して、市民の多様で豊かな暮らしの実現と地域活性化、交流人口の拡大を図るとともに、ヒートアイランド対策としての環境衛生機能、不動産価値を向上させる経済的機能などの多様な機能を有する緑を積極的に活用するグリーンインフラの取り組みが必要ではないか。
- ・将来のリスクマネジメントを踏まえた、さらなる強靱な仕組みづくりを目指す必要がある。
- ・近未来技術実証の取り組みの一環として、ドローン飛行等を実施しているが、様々な防災・減災の取り組みを災害対応力の向上につなげるだけでなく、地域経済の活性化につなげていくことも必要ではないか。
- ・地震・津波だけでなく、風水害に対する市民や企業等の防災・減災意識をさらに高めるとともに、女性や若者、障害者、外国人居住者、企業、研究機関といった多様な主体が関わる仕組みづくりを強化していく必要があるのではないか。
- ・震災の経験と教訓を継承し、発信することで、本市の防災力の向上につなげるとともに、防災環境都市としてのブランドへと高めていくさらなる取り組みが必要ではないか。

目標

多様な主体が積極的に関わり合う、開かれた地域づくり

地域によって人口減少・少子高齢化の進行の度合いや抱えている課題は様々であり、よりきめ細かな視点による対応が重要です。町内会をはじめとして、地域で活動する団体やNPO、企業など多様な主体が関わりあい、それぞれが協働することで、地域への愛着を深めるとともに、より良い暮らしにつながるよう、開かれた地域づくりを進めます。



01 地域×支え合い

- 住民同士の支え合いと関係機関等との連携による、誰もが地域で安心して生活できる仕組みづくり
- 多様性の理解促進（多様な性のあり方、障害等の理解促進、交流の場づくり等）
- これからの地域づくりのあり方の検討と担い手の確保
- 多様な主体が垣根なく地域づくりに関わりやすい仕組みづくり（テーマ型コミュニティの構築支援、連携強化、コーディネーターの確保・育成）

02 地域×交通

- 通勤・通学、買い物や通院などに欠かせない移動手段について、公共交通機関の行き届かない地域などを対象とした、地域交通のあり方の検討および実践
- モビリティ・マネジメントなど既存の公共交通機関の利用促進と、公共交通以外の新しい仕組みの検討

03 地域×未来技術

- 地元企業の CSR 活動や CSV 活動の促進、企業が地域で活動しやすい仕組みづくり、スマートシティの取り組みや先端技術など企業が持つノウハウの未来のまちづくりへの活用
- 企業との協働を通じた、自動走行やMaaSなど最先端の交通サービスの導入に向けたモビリティチャレンジの推進

04 地域×交流

- 地域独自の資源や生活文化、東部地域や中山間地域などにおける農との関わりなどを通じた地域内外の交流促進、地域への愛着喚起

施策の
方向性
(例)

【参考】
審議経過

- ・ 世代、性別、障害、国籍のような多様性の理解浸透に向け、東京オリンピック・パラリンピックのレガシーを受け継ぎ、スポーツや文化芸術、農業をはじめ様々なツールを生かした多世代・多様な主体間の交流環境の創出
- ・ 世代、性別、国籍、障害などを超えて、多様な主体がお互いを尊重し、心と命を守る支え合いの基盤づくり
- ・ 地域活動への住民参加の促進、町内会活動等の担い手の確保・育成
- ・ 地域交通の確保や買い物弱者対策、見守りなど多様な地域課題に即して、住民、町内会等地域団体、NPO、教育機関、企業、起業家などが連携しやすい環境づくり（課題を共有する機会づくりや解決に向けた協働・実践の場づくり、各主体の連携強化、コーディネーターの育成・支援、地域コミュニティのあり方検討）
- ・ 教育機関と地域や NPO、企業をはじめとした各主体がつながり、まちの魅力づくりや地域課題解決に向けた実践を重ねることができる場の創出

【参考】
第 6 回
審議会

- ・「まるごと」地域で相談できる場づくり。伝えられない人をつなぐ人が必要。
- ・地域団体、NPO と高校生・大学生のコラボレーション。地元の大学と地域との連携が大切であり、色々と力になる。生徒・学生が地域団体の話し合いや運営のサポートをする。
- ・地域課題に対する ICT の活用がさらに必要であり、企業との連携も必要。これから副業化が進んでいくので、企業が地域で活動できる仕組みをつくる。
- ・地域には声を出せない人、出しにくい人があり、支援や制度が届かない人もいる。「つなげる」役割の人たちが知り合える他分野・多セクターの場が必要。
- ・地域の良い取り組みが伝わっていない。地域の文化や伝統の情報発信が必要。

【参考】
第 1～5 回
審議会
主な意見

- ・元気な高齢者が協働、連携、活躍できる仙台。健康寿命の延伸の視点は大事。
- ・高齢になってからの学びも大事であり、強調して欲しい。学びを通して地域社会に貢献する人材も必要。高齢者の生きがい創出を含め、人生 100 年時代のリカレント教育が必要。
- ・一人ひとりの子どもの興味関心、探求心を伸ばしていくことが、予測できない時代に活躍していける人を育てることにつながり、仙台の個性につながるのではないか。仙台自分づくり教育は個性教育の面もある。
- ・自分で考える力を育むにあたっては、企業の力は大きい。企業が教育の現場に入って子どもたちの価値観を広げることができれば良い。
- ・地学連携に向けたプラットフォームの構築。学生と企業が連携して課題解決しているモデルはどうか。
- ・特に介護現場では学ぶ環境をそれぞれの職場できちんと作ること、本人がチャレンジしていく意識を育てることが大事。
- ・働き手よしのまちだとプロモーションできるよう働き手の希望とマッチした職場づくりが必要（働き手、企業双方にとって持続可能な魅力ある働き方。結果イノベーション等につながるように）。

【参考】
分野ごとの
主要な論点

- ・地域団体や市民活動団体、企業、教育機関、行政等が適切な役割分担のもとに連携を促進させ、それぞれの長所や資源、アイデアを活かしながら、地域でともに暮らす人々が課題認識を共有し、自分ごととして主体的に地域づくりに取り組むための施策展開が必要ではないか。
- ・歴史文化や自然など、仙台ならではの地域資源等を活用した魅力的なコンテンツの発掘・磨き上げ、それらの効果的な情報発信、あわせて交流人口拡大の視点でのまちづくりを進めていく必要があるのではないか。
- ・あらゆるライフステージにおいて、チャレンジの土台作りを含め、大学等との連携、学びの環境づくりなど生涯学習のあり方を検討する必要があるのではないか。
- ・今後は大学においても、地域や企業との交流を促進させ、人口減少社会における課題への対応やまちの魅力づくりの検討に積極的に加わるのが重要であり、大学の持つ知的資源等の生かし方について検討する必要があるのではないか。

目標

子どもが笑顔でいられる、社会全体で子ども・子育てを応援していくまちづくり

子どもは未来への希望そのものです。境遇に左右されることなく、心から笑顔で育つ環境づくりと、地域社会全体で子どもの育ちと子育てを応援していく環境づくりに取り組みます。そして、子どもを通じて家庭はもちろん、関わる方々も生きていく上で大切なことを新たに学ぶことができる、みんなが成長していく子育てを応援社会を目指します。



01 子ども×社会

- 子どもの目線に立って、いじめや不登校、虐待など子どもに関する諸課題に対応し、地域社会全体で子ども・子育てを応援していく機運の醸成
- 貧困対策（学びや遊び、地域交流の場づくり）、ひとり親家庭への支援

02 子ども×家庭

- 子育ての自信と喜びにつなげる支援体制の強化(育児環境における孤立防止に向けた相談体制の充実、親への子育てを学ぶ機会の提供)
- 身近に相談できる人がいない方や同じ悩みを抱える方、これから子を産みたい方など子育て世代が気軽に集い情報交換できる機会の創出

施策の
方向性
(例)

03 子ども×未来デザイン

- 仙台子ども体験プラザや職業体験、社会人との関わりの場づくりなどを通じた、子どもたちの職業観の醸成
- 探求学習など子どもの興味を掘り下げ個性を伸ばす新しい学びの仕組みづくり
- 地域の歴史資産やゆかりのお店など、地域を知る機会や住民と触れあう機会の創出などによる、社会性や地域への愛着を育む取り組みの推進

04 子ども×FUN

- 子連れで外出しやすく、ストレスなく子育てを楽しめるまちづくり(子育て家庭に配慮した開発誘導、子育て世代も楽しめる街中の魅力づくり、公園の利活用)
- 自然資源や四季折々のイベント、文化・スポーツとの触れ合いなど、子どもたちが楽しみながら様々な体験ができる環境づくり

【参考】
審議経過

- ・切れ目のない子育て支援施策の充実はもとより、関係機関との連携を含め、地域社会全体で見守る子ども・子育て世帯に優しい環境づくりや、全市的な子育て支援ネットワークの構築
- ・学校、家庭、地域、企業、行政の連携（社会全体で子どもを守り育む環境づくり、地域に対する子どもたちの愛着喚起等）、豊かな心や健やかな体、また、人としての思いやりや自分で考える力を育み、社会の著しい変化にも適応できる柔軟性を持った子どもの育成に向けた学びの質・環境の向上
- ・地域住民、学生や児童生徒が多世代交流促進、地域に関する学び、体験学習などを通じて自ら進んで地域との交流を深め、仙台の歴史文化などと触れ合うことで、地域への愛着を育む好循環の創出
- ・歴史文化・自然科学等の生涯学習施設等を活用した学びや「楽都」としての事業展開など文化芸術により親しむ環境づくり

**【参考】
第6回
審議会**

- ・相談相手がいることで親に落ち着きを与えることができる（サポートする環境、地域の連携小児科医・看護師の利用）。
- ・「みんな違うことが当たり前」ということを知る、教える環境づくりが大事。
- ・引きこもりの人が引け目を感じずに生きられる地域、支えられる地域だと良い。
- ・「心身ともにたくましく社会に羽ばたける」は理想だが、地域社会で自分らしく生きられる社会、一人ひとりが活かされる社会であるべき。
- ・時代の最先端を感じているのは子ども。子どもと一緒に大人も学びましょうというムーブメントを作りたい。ママには多様性を教える機会を作り、子どもがいない人にも子育てについて知る機会を作ってはどうか。
- ・大人は画一的な価値観に縛られがち。大人がどのような価値観を持って子どもに示すかは大事。
- ・子どもの目線に立って、多様性が当たり前になっている社会を目指す視点も必要。働く場も子どもに関わる組織も変わる必要がある。

**【参考】
第1～5回
審議会
主な意見**

- ・家庭も学べるような場所が必要。ペアレンツトレーニングのように、親そのものの教育的な視点も子育てには重要ではないか。
- ・貧困の問題への対応が必要ではないか。
- ・働き手として女性が重要になっており、共生を経済の活性化が支える。
- ・ハード整備のみならず、心の豊かさ、心のバリアフリーを打ち出せないか（海外で子どもと出かけたとき周りの人が当たり前のように手伝ってくれる事例を紹介）。
- ・子どもは地域に密着した生活者。子どもという視点を大切に、子どもの参画できるまちづくりという概念を取り入れてはいかかがか。
- ・このまちで産んで良かった、育てて良かったというまちであれば良い。
- ・仙台で育つという視点も大事。子どもたち自身にもこの10年間を見てもらいたい。
- ・子どもたちの地域や社会を愛する心を育てていくことが重要。

**【参考】
分野ごとの
主要な論点**

- ・地域全体で子どもたちやその家族を支える機運の醸成を図り、身近な地域で多様な支援のもと子どもを育てることができる社会づくりに取り組む必要がある。
- ・学校支援地域本部や放課後子ども教室など、地域との連携を図る取り組みを、より進めていく必要があるのではないか。
- ・障害の有無に関わらず、お互いを認めあい、学びあう関係性や環境が重要であることを、学校や保護者、子ども同士がきちんと理解し、ライフステージを通じた一貫した支援が行き届く本市としてのインクルーシブ教育システムの確立に取り組む必要があるのではないか。
- ・ライフステージに応じた多様な就業・育児・介護等のあり方があるということについて、事業者を含め社会全体の認識を深めていくためのより丹念な取り組みが必要ではないか。

目標

自分らしく生きるための人生設計・チャレンジの応援

人生 100 年と言われる時代において、健康であること、学び続けることは、豊かな人生を送るうえでの重要な鍵となります。全ての世代における健康づくりを進めるとともに、学びの機会を創り出し、将来への希望を描ける環境づくりに取り組みます。そして、働き方をはじめ、誰もが自分らしい生き方を見出すことができ、地域や経済の活性化につながるまちづくりを進めます。



01 学都×地域デザイン

- 教育機関の知見、児童生徒・学生等の柔軟な発想を生かし、地域における様々な主体とともに、地域の魅力創出に向けチャレンジできる場づくり
- 若者の考えを政策形成や課題解決などに活かせる仕組みづくり

02 働き手×キャリアデザイン

- 個々人の状況（育児、介護等）に合わせた多様な働き方を応援する環境づくり（テレワーク、在宅勤務、兼業・副業など）
- キャリアアップ・キャリアチェンジにつながるリカレント教育の推進
- 起業支援（スタートアップ環境の充実、起業のすそ野拡大）

03 高齢者・障害者×アクティブデザイン

- 経験豊かな高齢者と専門的な仕事や地域づくりへのマッチング
- 障害のある方・事業者相互の理解促進による充実した就労環境づくり、東京パラリンピックを契機としたパラスポーツをはじめとする多彩な交流の促進

04 全世代×ヘルスデザイン

- 子どもから高齢者にわたる健康意識の向上と心の健康づくり。民間企業等と連携した、楽しみながら取り組める健康プロジェクトやスポーツ振興
- ICT 業界との連携による、医療や介護分野が抱える課題解決の促進、健康産業の振興

施策の
方向性
(例)

- ・ 地域活動への住民参加の促進、町内会活動等の担い手の確保・育成
- ・ 教育機関と地域や NPO、企業をはじめとした各主体がつながり、まちの魅力創出や地域課題解決に向けた実践を重ねることができる場の創出
- ・ 働く場所、時間などライフステージに応じた柔軟な就労が実現され、リカレント教育など個々のスキルアップに取り組みやすい多様な人材が活躍できる環境づくり（企業の組織変革力の強化）
- ・ 世代、性別、障害、国籍のような多様性の理解浸透に向け、東京オリンピック・パラリンピックのレガシーを受け継ぎ、スポーツや文化芸術、農業をはじめ様々なツールを生かした多世代・多様な主体間の交流環境の創出

【参考】
審議経過

**【参考】
第6回
審議会**

- ・支店経済を強みとして、転勤するなら仙台へ、働きながら学べる都市をアピールしてはどうか。
- ・働く楽しさを知る教育を進めるべき。大学生も企業の話聞いて生き方選ぶことが大事。
- ・仙台市のママの就職率が低いため、改善する取り組みが必要。
- ・女性は長生きだが介護が必要な期間も長く、女性への健康支援が活躍につながるのではないかな。
- ・「子育て世代（母親）の働く場づくり」「高齢者の生きがいの場づくり」として、例えば、シェアアグリは短時間勤務の導入が可能な仕組みである。また、高齢者が若干の収入を得ながら生きがいにもつながる仕組みを作ってはどうか。
- ・多様な働き方の観点で重要なのはライフステージではなく、本人の生き方や希望である。生き方に応じたキャリアモデルを広げることができれば良い。
- ・心の健康づくりを支援する取り組みとそれをサポートする仕組みづくりが必要。
- ・IT業界ではない企業でも、勤務時間や時間帯など柔軟に働くことができれば良い。
- ・多様な働き方ができれば、様々な活動に参加できる。町内会の取り組みなどについて、仕事を休むと気が引けるが、地域活動に参加することを会社が勧奨することがあっても良い。

**【参考】
第1～5回
審議会
主な意見**

- ・元気な高齢者が協働、連携、活躍できる仙台。健康寿命の延伸の視点は大事。
- ・高齢になってからの学びも大事であり、学びを通して地域社会に貢献する人材も必要。高齢者の生きがい創出を含め、人生100年時代ではリカレント教育が必要。
- ・一人ひとりの子どもの興味関心、探求心を伸ばしていくことが、予測できない時代に活躍していける人を育てることにつながり、仙台の個性につながるのではないかな。仙台自分づくり教育は個性教育の面もある。
- ・自分で考える力を育むにあたっては、企業の力は大きい。企業が教育の現場に入って子どもたちの価値観を広げることができれば良い。
- ・特に介護現場では学ぶ環境をそれぞれの職場できちんと作ること、本人がチャレンジしていく意識を育てることが大事。
- ・働き手よしのまちだとプロモーションできるよう働き手の希望とマッチした職場づくりが必要（働き手、企業双方にとって持続可能な魅力ある働き方。結果イノベーション等につながるように）。

**【参考】
分野ごとの
主要な論点**

- ・各世代を通じた生活習慣病予防の対策を推進する必要があるのではないかな。
- ・学力面のみならず、社会に出ることを意識した、人としての思いやりの気持ち、社会環境の著しい変化にも適応できる柔軟性を持った児童生徒を育成するという観点の取り組みを、より進めていく必要があるのではないかな。
- ・あらゆるライフステージにおいて、チャレンジの土台作りを含め、大学等との連携、学びの環境づくりなど生涯学習のあり方を検討する必要があるのではないかな。
- ・人材不足に対応するには、企業等が働き方改革を進め、女性、高齢者、障害のある方など多様な人材が能力を発揮できる環境づくりの支援が必要ではないかな。

目標

東北を舞台にした社会課題解決・活力還流モデルの構築

人口減少が進み課題の先進地といわれる東北の創生なくして本市の発展を望むことはできません。本市の中核機能や学都としてのポテンシャルを生かし、東北全体をチャレンジフィールドと捉えて社会課題を先進ビジネスモデルへとつなげる仕組みを構築するとともに、東北への誘客を牽引することで、世界を見据えた東北への活力還流に取り組みます。



施策の
方向性
(例)

01 東北×科学技術イノベーション

- 次世代放射光施設整備を見据えた研究開発機関や関連企業の立地・集積によるリサーチコンプレックスの形成、活用に向けた東北の企業のチャレンジ応援
- 東北の地域産業の強みや課題を切り口に、先端技術を活用した新たな製品やサービスを生み出す仕組みづくり
- 大学の知的資源を活かした大学発ベンチャーの推進

02 東北×ソーシャルイノベーション

- 東北全体をフィールドと捉えた社会起業家の育成・成長支援、社会的・経済的なインパクトを生み出すロールモデル起業家を輩出するエコシステムの創出
- 東北のソーシャルイノベーションの現場を通じた学びの場づくり、さらなる社会起業家の集積や多様な主体との協業の創出

03 東北×広域観光

- 東北の魅力を発信する拠点づくり、東北におけるネットワークの強化
- 多彩な祭りをはじめとした東北の豊かな自然・歴史・文化などの資産を生かした誘客促進、東北全体を視野に入れたシティプロモーション

04 東北×若者

- 若者等の地元定着や高度人材等の UIJ ターン就職による人材確保の促進
- 魅力ある雇用の創出に向けた地域経済を牽引する企業の輩出、グローバルなビジネス展開や新事業創出への支援など地元企業の成長促進

【参考】
審議経過

- ・地元企業等の成長や新たなチャレンジを応援し、魅力の向上を図るとともに、雇用確保に向けた発信力の強化を後押しする取り組み（地域経済への高い波及効果が期待される企業の成長支援、域内の経済循環促進、農業の高付加価値化、海外等への市場開拓、若者の地元定着策など）
- ・ICT による地域産業の高度化や次世代放射光施設の立地を生かした研究開発拠点の集積促進、起業・創業などのチャレンジがしやすい環境づくり（経済成長と社会課題解決の両立を目指した地域経済システムの構築、起業・創業後のフォローアップなど）
- ・東北の玄関口としての拠点性の向上、交流人口ビジネスの活性化（歴史文化資産や体験プログラムなど観光コンテンツの充実、多様な事業者の参画や育成、来仙者の受入環境整備、東北の魅力発信強化など）

**【参考】
第6回
審議会**

- ・東北を牽引するまちとして、東北を意識した仙台を掲げ、全国のモデルになるわくわくするような視点が入ると良い。
- ・次世代放射光施設は起爆剤になり得る。学術面や資金面においてバックアップが必要。
- ・誰もが使いこなせる、人にやさしいテクノロジーが当たり前の社会。質の高い知的資源を市民や企業が身近に使える社会になって欲しい。
- ・日本人や東北の方が仙台に来る場合は「都市型観光」だが、インバウンドの視点で考えると、仙台空港を経由して東北を巡るので、東北を周遊する玄関口としての拠点になり得る。
- ・仙台の歴史や伝統も大事にし、高付加価値を付ける。
- ・学生が地元定着しないと言われるが、地元企業のPR（働きがいなど）が不足している。学生や親に伝わっていないのではないか。

**【参考】
第1～5回
審議会
主な意見**

- ・震災を経て若者を中心とした地域のために何かしたいという人が多くなっている強みを活かした社会起業促進の土台づくり。
- ・仙台の特徴は、地域や社会のために考えている、チャレンジャーが多いまちであること。自分たちが主体として住みやすいまちを創るという意味を込めて、「日本一集う起こす人がつくる、日本一住みやすいまち」。
- ・起業支援、自分のやりたいことにチャレンジできる環境づくりが重要。
- ・医療・介護・福祉を成長産業と捉え、安定した高齢化社会の構築を。
- ・テクノロジーはアグリテック、ヘルステック、ポリテックなど色々なものに掛け合わせることができる。
- ・東北の中核として独自の連携施策を練り上げる必要がある。
- ・ゲートウェイとして東北が魅力的になるような施策展開が必要。

**【参考】
分野ごとの
主要な論点**

- ・仙台の経済成長には、ポテンシャルを生かした東北全体の持続的な発展が不可欠であることから、ビジネス創出に向け、東北全域を対象とする一気通貫した起業支援プログラムや大学発ベンチャー支援を充実させることなどにより、多様化する社会的課題の解決と経済成長を両立させる起業家を育てる取り組みを充実させる必要があるのではないか。
- ・ICT関連企業の集積促進及び地元の異業種との連携を進めることを通じて、地域産業の高付加価値化や労働生産性の向上を含む、イノベーション推進等による地域経済の活性化を目指していく必要があるのではないか。
- ・仙台・東北の経済に高付加価値化と大きな波及効果を生み出す次世代放射光施設を最大限に経済活性化に生かしていく必要があるのではないか。
- ・東北のゲートウェイとして広域連携を強化することで、東北全体への誘客や周遊促進を図る必要があるのではないか。
- ・歴史文化や自然など、仙台ならではの地域資源等を活用した魅力的なコンテンツの発掘・磨き上げ、それらの効果的な情報発信、あわせて交流人口拡大の視点でのまちづくりを進めていく必要があるのではないか。

目標

杜の都の象徴としての価値を高め、賑わいと活力を生み出す都心の構築

本市の都心は、多くの人々が集まる交流の要所であり、仙台の顔ともいえるべき場所です。「杜の都・仙台」を象徴する通りやエリアの特性を最大限に生かしながら、創意を持つ多様な主体と連携し、働く場、楽しむ場として多くの人が集い、賑わいと交流、持続的な経済活力が生み出される都心をつくり出します。



01 都心×イノベーション

- 老朽建築物の建て替えやニーズに合ったオフィスビルの整備促進など、国内外からの投資を呼び込む国際競争力のある魅力的なビジネス環境の整備
- 地元企業、起業家、大学や国内外の企業の交流の密度を上げ、イノベーションを生み出すための仕掛けづくり、新たな事業の創造を応援する文化・コミュニティの醸成（スタートアップエコシステム構築）

02 都心×リノベーション

- 都市公園や道路などの公共空間、民間の遊休不動産のさらなる利活用などによる、人と文化が織りなす新たな賑わいの創出
- 都市のリノベーションを積極的・自発的に進めることができる多様な価値観を持つクリエイティブな人材の発掘・育成・支援

03 都心×回遊

- 都市機能の誘導、都心交通の再構築、魅力的な公園の活用や多彩な資源を活用した体験プログラムの創出、中心部商店街の活性化など、多くの人々が訪れ、歩きたくなる面的な賑わいの創出（市役所本庁舎建て替え、勾当台公園市民広場、音楽ホール整備の検討等）、杜の都にふさわしい街並み景観づくり
- 定禅寺通や青葉通、宮城野通の活性化をはじめ、通りの特性を活かしたエリアマネジメントなど地域主体の取り組みの促進

04 都心×防災環境

- 建築物の建て替えなどを通じた防災力や環境性能の向上（ゼロ・エネルギー・ビルディングやグリーンビルの推奨等）
- 個性ある公園や街路樹など、憩いと安らぎを生む緑のネットワークの充実

施策の
方向性
(例)

**【参考】
審議経過**

- ・民間投資の呼び込み（仙台駅周辺をはじめ、高度な都市機能を有し賑わい創出に資するビルの建設誘導、老朽化した建物の改修・更新の促進など）
- ・定禅寺通の活性化や本庁舎建て替え等を契機とした都心部全体における面的な賑わいの創出（歩いて楽しめる環境づくり（回遊性向上・都心交通のあり方検討、公共空間の有効活用など）、通りごとの魅力づくり、中心部商店街の活性化など）
- ・東北の玄関口としての拠点性の向上、交流人口ビジネスの活性化（歴史文化資産や体験プログラムなど観光コンテンツの充実、多様な事業者の参画や育成、来仙者の受入環境整備、東北の魅力発信強化など）

**【参考】
第6回
審議会**

- ・都心再構築は中心市街地の魅力向上、固定資産税のアップが大きな目的。マンション低層部を含め、商業と住民が混在し、人が街中に出てきたくなるような街を目指すべき。
- ・災害対応型のグレードが高い建物を作れば企業誘致にもつながる。
- ・都心というと商業地区をイメージするが、「杜の都の都心」という観点で見ると広瀬川や青葉山を含めた要素もあるので、見える形で杜の都を明示すること(都心のグランドデザイン)が必要。
- ・都心の象徴は、青葉通、広瀬通、定禅寺通の3本の通り。通りをいかに生かすか。
- ・日本人観光客の多くは「都市型観光」だが、外国人の観光(インバウンド)の視点で考えると、仙台空港を玄関口とした東北各地を巡る「広域周遊」の拠点になる。
- ・都市の暮らし自体を売りにすることを追求すべき。観光は人数ではなく、経済効果(観光消費単価を上げる)を重視すべき。質の高い観光を提供することを大切にする。

**【参考】
第1～5回
審議会
主な意見**

- ・歩いて楽しいまち、回遊性向上(自動車交通と徒歩の関係)。
- ・都心部では暑熱化が進む懸念があり、回遊性や賑わいととも、快適性や居心地の良さも議論して欲しい。
- ・稼ぐ都心という視点が大事。
- ・中心部商店街は魅力アップより再生に力を入れていかなければならない段階。
- ・定禅寺通の活性化と本庁舎建て替えに加えて重要なのは、仙台駅の周辺をどうするか。老朽化した建物を更新するだけではなく、駅前全体をどうするかと考えることが重要。
- ・世界から選ばれる地域にならなければならない。コンベンション、働く場、旅行の場などいろんな面で世界を意識するべき。

**【参考】
分野ごとの
主要な論点**

- ・都市の顔づくりとして、集積された都市機能や仙台ならではの都市個性を生かしながら、公民が連携し、民間投資を呼び込むまちづくりに取り組む必要があるのではないかな。
- ・公共空間の有効活用や通りごとの魅力を生かしたまちづくりを進め、都心全体の回遊性の向上を図る必要があるのではないかな。
- ・歴史文化や自然など、仙台ならではの地域資源等を活用した魅力的なコンテンツの発掘・磨き上げ、それらの効果的な情報発信、あわせて交流人口拡大の視点でのまちづくりを進めていく必要があるのではないかな。

VI 基本的な施策の方向性（概要※詳細は資料4－3）

【環境】世界を牽引する防災環境都市へ

（1）防災環境都市づくり

- ・東日本大震災の経験と教訓の継承・発信（国際会議等を通じた発信、震災復興メモリアル事業）
- ・防災意識の高い地域づくり（SBL養成、多様な主体と連携した防災減災対策、仙台版防災教育）
- ・強靱な都市基盤の整備（強靱な都市基盤づくり、災害時の情報伝達、公共施設等耐震化）
- ・防災を通じた地域経済の活性化（先端技術の導入、防災ビジネスの促進）

（2）環境に優しい快適に過ごせるまちづくり

- ・脱炭素社会を目指したまちづくり（温室効果ガス排出削減、再生可能エネルギー導入、啓発）
- ・資源循環まちづくり（ごみ減量・リサイクル、プラスチック等資源循環、廃棄物適正処理）
- ・自然と共生したまちづくり（自然資源の維持管理、自然環境と都市機能が調和した土地利用推進）

（3）杜の都の息吹を感じられるまちづくり

- ・暮らしを彩る緑の活用（魅力ある公園づくり、都市緑化、市民がみどりに親しみ守り育む活動の促進）
- ・歴史と風格を感じるまちづくり（条例等に基づく良好な景観形成、歴史文化資源保存・活用）
- ・グリーンインフラの導入（緑による自然災害の軽減等、子育て・教育など緑の多機能性活用）

【共生】多様性が社会を動かす共生のまちへ

（1）長寿を謳歌し健康で生きがいをもって暮らせるまちづくり

- ・健康で生きがいを持って活躍できるまち（健康寿命延伸、医療救急体制充実、高齢者の活躍）
- ・住み慣れた地域で安心して暮らせるまちづくり（地域包括支援Cや関係機関連携、認知症対応）
- ・介護サービス基盤の充実と人材確保（人材の確保、ICT分野との連携、基盤整備）

（2）障害のある方もない方も違いを尊重しあい、支えあうまちづくり

- ・共生社会の実現に向けた障害理解の促進（啓発、バリアフリー・ユニバーサルデザイン導入）
- ・障害のある児童や発達に不安を抱える児童への支援（早期療育、発達に応じた支援体制）
- ・安心して暮らせる生活環境の整備（相談体制整備、生活基盤整備、重症心身障害児者向け支援）
- ・生きがいにつながる就労と社会参加の促進（雇用促進、スポーツ・文化芸術等交流活動促進）

（3）子育てしやすいまちづくり

- ・切れ目のない子育て支援の充実（相談体制充実、妊娠前からの切れ目のない支援体制構築）
- ・安心して子どもを預けることができる環境づくり（基盤整備、保育サービスの充実、保育士確保）
- ・子どもたちを守るセーフティネットの強化（児童虐待・DV対応、貧困対策）
- ・子育て応援まちづくり（仕事と家庭の両立支援、地域における身近な子育て支援機能の充実）

（4）多様な主体が地域で関わり、支えあうまちづくり

- ・地域の顔が見える関係づくり（町内会等活動団体支援、担い手確保、住民主体の地域づくり）
- ・多様な主体が連携する環境づくり（多様な主体が関わりやすい環境づくり、コーディネーター育成）
- ・多文化共生社会づくり（相談機能充実、地域交流の場づくり、外国人の子どもへの対応）
- ・男女共同参画の推進（政策形成への女性の参画、女性への暴力の根絶、ハラスメント対策）
- ・多様な性のあり方を尊重する環境づくり（理解促進、支援策の検討・実施）
- ・安全安心な暮らしを支える環境づくり（空き家管理、防犯、道路の安全管理、交通安全、消防対応）
- ・郊外地域の地域再生（暮らしを支える都市機能の維持・改善）
- ・誰もが安心して共生できる地域福祉の推進（担い手育成・支援、関係機関とのネットワークづくり）

【学び】 学びと挑戦の文化が根付くまちへ

(1) 子どもたちが健やかに学び成長する環境づくり

- ・個性と社会性を育む環境づくり（自己肯定感・社会性等を育む取り組み、幼児教育、幼保小連携）
- ・確かな学力の育成（基礎的知識の定着・応用力育成、情報化推進、個の状況に応じた支援）
- ・地域とともに歩む学校づくり（コミュニティ・スクール、学校支援地域本部、放課後子ども教室）
- ・安心して学べる環境整備（いじめ・不登校の未然防止対策、特別支援教育の充実、心のケア）

(2) 学都・仙台の資源を生かしたまちづくり

- ・若者の力を生かしたまちづくり（教育機関と地域の接続促進、政策形成に参画しやすい環境づくり）
- ・知的資源を生かしたまちづくり（研究開発促進、大学ベンチャー、学都コンソーシアム運営）

(3) 多彩な学びを楽しみ、社会に生かせるまちづくり

- ・豊かな生涯学習機会の創出（社会教育施設や多彩な学びの資源の連携促進、人材ネットワーク）
- ・地域における学びの充実（学びを通じた担い手発掘・育成、生活文化等奥深い学びの資源の発掘）
- ・人生100年時代の学び直し（リカレント教育、高齢者学び直し）

(4) 文化芸術振興による豊かな創造性を育むまちづくり

- ・せんくらやジャズフェスなどのイベントの開催、市民が音楽に親しめる環境づくり
- ・楽都の拠点づくり（音楽ホール整備検討）、舞台芸術を通じた創造性・表現力向上、伝統文化継承
- ・美術や映像など、市民がアートに親しめる環境づくり

【活力】 東北の活力を生み出す創造のまちへ

(1) 時代の変革に対応する地域経済の成長まちづくり

- ・地域経済を牽引する企業の輩出（牽引企業の成長支援、海外・首都圏への販路開拓、新事業展開支援）
- ・中小企業の持続性向上・経営力強化（事業承継、域内資金循環拡大、地域貢献促進、商店街活性化）
- ・リサーチコンプレックス形成（次世代放射光施設の立地を中核とした研究開発拠点及び企業の集積）
- ・Society5.0に向けたイノベーション促進（最先端技術×社会課題、ICT関連企業集積、人材育成）
- ・農林業振興（収益性向上、多様な経営体育成、生産基盤確保、多面的機能の維持・向上）

(2) 多様な人材が活躍し、社会のイノベーションを生み出すまちづくり

- ・起業支援（社会的・経済的インパクトを生み出すビジネス、東北の社会課題解決、すそ野拡大）
- ・個々人の生き方を尊重した多様な働き方の推進（女性・外国人活躍、多様な働き方の導入）
- ・若者の地元定着促進（地元企業の情報発信、交流機会創出、UIJターン、奨学金返還支援）

(3) 仙台ならではの魅力の磨き上げと交流人口ビジネスの活性化

- ・観光資源磨き上げ・受入環境整備（観光資源の発掘・創出、観光に係る担い手育成、西部観光振興）
- ・誘客促進・発信力強化（ターゲットを明確にしたプロモーション、インバウンド推進、MICE誘致）
- ・広域連携強化（東北一体となった魅力発信、魅力発信拠点整備、ネットワークの強化）
- ・スポーツ振興（プロスポーツ振興、市民がスポーツに親しめる環境づくり、オリパラレガシー）

(4) エリアの特性を生かし活力を生み出す都市機能の強化

- ・機能集約型まちづくり（市街地の拡大抑制、公共交通を中心とした持続可能な交通網形成）
- ・都心まちづくり（民間建築物建替え促進、定禅寺通活性化、回遊を促進させる交通環境づくり）
- ・地下鉄沿線まちづくり（土地区画整理事業など都市機能の集積、エリアマネジメントの推進）
- ・活発な都市活動を支える交通政策の推進（物流・交流を促進する道路網形成、交通環境改善）
- ・公共交通の快適性・利便性向上（公共交通利用促進、施設の利便性向上、最新モビリティ導入）
- ・既存ストックの利活用促進（リノベーション促進、道路空間利活用、まちづくり人材育成）

Ⅶ 区別計画

- ・人口減少や少子高齢化の進展は、区ごと、地域ごとに異なり、課題も様々です。今後はより一層、地域住民が主体となって地域づくりに積極的に取り組める環境づくり、区への愛着を深める魅力づくりが重要になります。
- ・自分と関わりのある区や地域を改めて見つめ直し、今後の地域づくりの方向性を共有するとともに、一人ひとりが日常生活をより豊かにするために、又は自分と縁がある地域のために何かしたいという想いを行動に移すきっかけになるよう、区別計画を策定します。
- ・区民とともに協働意識を高め、多様な主体がつながりを持って地域づくりに取り組み、地元へ愛着を感じながら安心して暮らすことができる地域社会を目指します。

以下、各区の計画を掲載

Ⅷ 進行管理の方針

現行計画では実施計画策定、市民協働による評価・点検等を記載

Ⅸ 資料編

総合計画審議会の審議経過、市民参画イベント等の結果、統計データ、年表、用語集等